

怪奇幻想私小説 「石榴」

かたみの品の鏡台を亡妻の仏壇がはりにしてゐる。妻が亡くなつて七年が過ぎた。

朝早く、詩をやつてゐるF君が石榴の実を数個たづさへてやつて来た。私は××元首相が撃たれたニュースを彼に聞かされて初めて知つた。幸ひ命はとりとめたものの、犯人が黨員だといふ為に大騒ぎになつてゐる様子だ。

「どうも思想のある連中はこはいね。」

「うむ、まつたくだ。無思想が一番だ。」

「はゝゝゝ。君の様に自然主義文学など書いてゐる輩が一番だ。」

「はゝゝ。もつともだ。」……

妻にF君の呉れた石榴を供へた。鏡に写真を貼つてあるのだが、それもだいぶ陽に焼けてぼろ／＼になつてゐる。

石榴の実は、皮が妙だ。何か、油彩画のやうな色合ひをしてゐる。これは熟しきつてないらしく、割れてゐない。割れてゐないと石榴という感じがしないから、このまましばらく妻に喰はせておかうと考へた。

昼になつてから思ひついて、墓に参つた。

妻には、結婚してからも子供ができなかつた。彼女は年齢のせゐだわと笑つてゐたが、私は心理的なものが多分にあつたと思ふ。なぜなら妻は昔芸妓で、妊娠を恐ろしいまでの厳格さで避けてゐたのである。

彼女は死の床で、私に再婚をすすめた。若い後妻をめとつて子供をこさへなさい、と言ふのである。その願ひはいまだに叶へてやつてない。

墓を久しぶりに洗ひ、草をむしつてゐる内に陽が傾きかけたので、家へ戻つた。

書齋の座卓の上に胡座をかい日暮れの街の音を聞いてゐたが、何気なく隣室の鏡台に目を遣ると、いつの間にやら石榴が割れてゐた。

「さうです、これが素晴らしいのです。」

と独りつぶやき乍ら鑑賞してゐると、何やら変な音がする。

ポト／＼ポト／＼……

薄暗がりなのでよく見えない。近づいてみた。果皮の割れ目から、かの蛙の目玉のやうな中身があふれ出して、皿から落ちて畳にこぼれてゐるのだつた。

珍しい光景なので、寝そべって目を凝らしながら眺めてゐたが、まもなく寝入ってしまったらしく、夜中に窓が月に輝いてゐるのに驚いて目を覚ました。

ほお、明るい / \ とはしやぎながら起き上がって畳に手をついた時、プゝゝゝと音がして手の下で何か粒状のものがたくさんつぶれた。確かめるまでもなく石榴の中身の粒であらう。

石榴が熟すとこんな風にあふれてくるものと初めて知つたが、それはそのままにして、今度はつぶさぬやうに気をつけながら書齋に戻つて原稿用紙に向かつた。文芸〇〇誌に頼まれた雑文であつた。

部屋が東向きなので、昼過ぎには早々と暗くなつてしまふ。文章を仕上げたのそのそと立ち上がり、隣室をのぞいてみた。

石榴の中身は既に部屋一杯にあふれてゐる。

一個をそつと取りあげてみた。まはりの透明質に包まれて、中心部に茶色い種が；光線の加減だらう、普通は白いのだらうが；子宮の中の胎児のやうに浮かんでゐた。

そんな粒の無数に散らばる遙かむかふに鏡台があるが、その石榴の皮はもはやひからびて、茶色の地に焦げ茶のそばかす様の点々がちらばつてゐた。

夕方に四谷へ行つて〇〇社に原稿を引き渡し、稿料をもらつた。久しぶりに荻窪で省線を降り、酒を飲んだ。

井草の方の妙正寺に、知り合ひで△△公論の記者をやつてゐたこともあるK君が下宿してゐるのでそこに泊まり、翌朝、珍しいものを見せてやる、とK君を連れて家へ戻つた。

石榴の部屋を開けて、様子が変わつてゐるのに気づいた。

粒は動いてゐた。；いや、粒ではない。虫のやうで、ああそれでは石榴の実は虫に喰はれてしまつたのかと思ふと、さうではない。

粒から何か生まれてゐたのである。部屋の向ふ半分の粒は、まだ前の通りであつたからわかつたのである。

「成る程、これは珍しい。」

K君はロイド眼鏡をはづし、目を近づけて見てゐた。

「先生、赤ん坊ですよ、これ」

指先でつゝいてゐるのを見ると、確かに人間の赤ん坊のミニチャアのやうなものであつた。

「泣きますかね。」

一匹をペン先で突くと泣き始めて、それが段々周りにひろがつてゆき、しまひには部屋全体で泣きはじめた。

おもしろいねとしばらく見てゐたが、一向に泣き止まない。そのまゝ泣き乍ら這ひ回るのが習性化してしまつた様な具合ひである。

赤ん坊たちは、よく見ると皆尻に寒天様のものを負つてゐたが、石榴の実のそれをそのまゝくつつけてゐるのらしい。

K君は早稲田で生物学を修めたと言ふ。それらしく説明を始めた。

「今はですね、この寒天様のもの、つまり彼らの生まれた卵の栄養を少しづつ撰つて生きてゐるらしいのです。しかしそれは一時的なことの筈で、それがなくなつたら他に栄養を求める事になる筈です。」

その時、K君はふと時計を見て、慌てた様子で挨拶もそこ／＼に帰つて行つた。私は仕事もないのでそのまま赤ん坊達を眺めてゐることにした。

既に部屋の向ふ半分の卵もかへつてをり、先に産まれた連中は段々育つてきてゐて、一寸程の大きさになつた者もをり、それにつれて泣き声もうるさくなつてきた。

眺めてゐて、小半時もたつた頃だらうか。K君の言つてゐたとほりになつた。

赤ん坊達は、尻の寒天様がなくなると、しばらくしてあちこちで仲間を喰ひ始めたのである。

鬨ひも争ひもなかつた。静かに、何となく他の赤ん坊を喰ふ。喰つてない時は泣いてゐる。下半身を他の奴に喰はれかけたまゝ、又他の奴の尻にかぶりついてゐる赤ん坊もゐた。

赤ん坊の数は見る間に減つてゆき、その分、残つた奴は大きく膨れていった。

大きくなるにつれ、赤ん坊共の様子がよく見えるやうになつて来た。

彼らは茶色かつた。体の中まで茶色かつた。喰はれても血が出ない。泥人形のやうな感じだ。顔は嬰兒のそのままで、視力のない目で顔をしかめて盛んに泣いてゐる。

ふと気づくと赤ん坊は六七匹になつてをり、それでもまだ喰ひ合つてゐた。

最後に残つた赤ん坊は片腕がなかつた。他のを喰ひ尽くすと、それは鏡台によりかゝる恰好で座り込み、いつまでも泣きつゞけた。

(一九八二年一月二〇日 定稿)

Copyright © 1982, 2010 by Tomohide H. Muranushi